

煩惱に浸かる私は おかげさまさえ邪魔にする

「煩惱即菩提」（煩惱はそのままさとりに）、又「不断煩惱即涅槃」（煩惱を断たずして、涅槃を得る）、と言われます。世間常識から考えますと、おかしな事ですね。煩惱を断ちきって悟りに向かうと言えばわかるのですが、煩惱がそのまま悟りに変わるのですから・・・人間は煩惱を頼りにし、楽しみ、そして苦しみます。そうしながら一生を終わっていくものでありましょう。「煩惱は家の犬、打てども去らず」とも言われます。煩惱の姿は「食欲」「愚痴」「瞋恚」の三毒の煩惱を中心として、それにともない性欲、利欲、名誉欲、愛欲、独占欲なども付随してきます。これは人間の本性のようなものであり、言い換えれば人間の生存の営みの活力ともなっているのです。人間が生きていくということは、この煩惱に振り回されているといつても良いのです。しかもここから一步も逃れることは出来ません。人間は一人では生きられません。人間は互いに生きるために秩序を守り、道徳を造り、法律を制定し煩惱の暴発をくい止めてきたのが、人間の歴史なのかもしれません。煩惱のままに生きていくならこの世は殺戮、戦争、奪い合いばかりでありましょう。たまには暴発し、悲惨な事件や、戦争などを起こしてきましたが、いや、今でも暴発があららこちらで見られますね。戦争などはこの煩惱がむき出しになった姿です。これは国の持っている煩惱かと言いますとそうではありません。私達一人一人が持っている「いざとなれば何をするかわからない」という、根っこがあると思



ます。それは人間というより「私」そのものが持っているものです。過去の戦争の糾弾、戦争責任を論じるのも大切ですが、いつもどこかに「その時代に私が存在したら」・・・という思いを持つのも必要だと思います。その時代に自分がいたら、戦争に進んで加担していった、私だったような気がいたします。他人ばかりが身勝手な煩惱を持っているのではなく、まずこの私が重たい煩惱を持っているとの、理解が大切です。自分がそうであることは他人もまたそうなのです。煩惱の仲間と言ってもいいのです。人間を本当に理解するということとは、自分の中にある一番恥ずかしくて、醜いものを、相手の中にも見出し、逆に相手の醜い部分を自分の中に発見した時ではないでしょうか。普段は虚勢を張り、見栄を張り、良いところばかりを見せつけようとしている私ですが、そのような弱さを互いに発見したときにこそ、人間同士のつながり、安心感が生み出されてくるように思えるのです。

私達は煩惱によつて結ばれ、生き続けてきたのです。しかし煩惱は生きる力であると共に、人間を滅ぼす原因をも持つ併せています。仏教はそのために煩惱からの解脱を説いてきました。しかしそのことは逆に煩惱からの解脱がいかに困難なのかを思い知らせるためだったのかもしれませんが。「無私」「無欲」の人は素晴らしいと思います。しかし残念ながら私には「欲のかたまり」「煩惱むき出し」という人の方が私にはずっと近いのです。どんなに本性を隠そうとも、私の根っこはそつちの方向なのです。どんな凶悪な犯罪者も、欲のまま金の亡者になっている人の中にも私は確かにいるのです。人間同士が真実につながっていくのは清らかな上辺の飾りたてたものではなく、このドロドロした煩惱まみれの自分を発見する事なのです。

「煩惱を通して本当の私を知る道」、これが仏教です。